

〈中国学 わたしの一冊〉

『玉篇』雑記

高田 時雄

編集子の要請に應えて、何か書く約束をしてみたのはいいが、これはという適当な書物が思い浮かばない。いくつかの書名が頭をよぎったが、どれも読者の興味を引きそうにもないので、すべて断念した。ここではやはりこれまで自分がやってきたささやかな研究に關連した事柄を紹介してみたい。『玉篇』をめぐる書物と人が主題である。

『玉篇』というのは南朝梁陳二代に仕えた顧野王（五一九—五八二）が編纂した字書で、三十卷からなる。野王というのが、この人の名で、字は希馮である。これについては、顧野王が前漢の馮野王の人となりを慕ったために、野王と改名し、字も希馮としたのだという説がある。ただしこの傳承は『陳書』の本傳にも、また『梁書』蕭子顯傳の付傳にも見えず、わずかに元の至大元年（二三〇八）立石の「松江寶雲寺記」に出るのみであるから、事實かどうかは分からない。ちなみにこの碑は書家として名高い趙孟頫（一二五四—一三二三）の手になるもので、墨跡の模本および拓本がかなり世に傳わっている。碑石自身は文革時に破壊され、ごく一部が殘石として現地に保存されているという。撰文は南宋の學者牟巖（一一二七—一三一一）で、そこに「西漢に馮野王あり、九卿に列せられ、性剛潔なり。顧公の希馮と字せしは、蓋しこれを慕うなり」とあるのがこの説の出處である。

顧野王はまた顧亭林とも呼ばれた。奇しくも明末の學者顧炎武と同名になるが、直接の關係はなさそうである。顧野王の場合は、亭林、すなわち松江縣（現在の上海市金山區）亭林鎮にあった亭林湖の南畔に住んだからという。

上記の碑文によれば、寶雲寺は唐の大中十三年（八五九）の開基だが、唐末天福五年（八九七）に湖水による被害に遭つたため、もう少し南方に遷すことになり、ようやく五代石晉の開運元年（九四四）に工事を始めたところ、二人の門徒が連日同じ夢を見た。梁朝の侍郎が現われて、斷碑のある場所を指し示した。そこでもとの寺のあつたところを探したところ、果たして片石が現れた。ロープをかけて引き出してみると、不完全ながら「寺南高基顧野王曾於此脩輿地志」（寺南の高基、顧野王かつて此に於いて輿地志を脩す）という十四文字が讀み取れた。『輿地志』はやはり『玉篇』と並ぶ顧野王の主著の一である。人々は驚き恐れて、寺のそばに祠を立てて祭つたという。ただし史書から知られる顧野王の閲歴からは、松江に住んだ形跡はうかがえない。ここでは顧野王はほとんど傳説上の人物として現れており、必ずしも『玉篇』の著者として語られてはいない。しかし今日、顧野王の名が著聞するのはひとえに『玉篇』の編者としてである。しかも顧野王の原本『玉篇』が佚存書として日本に傳えられ、近代以降に脚光を浴びたことと不可分なのである。

さて『玉篇』は、後漢の許慎『說文解字』、晉の呂忱『字林』の傳統を引く部首分類體の字書だが、収録字數は前二者よりも大幅に増補され、典據として掲げる典籍も經史子集の四部にわたつてすこぶる豊富になつてゐる。日本では王朝時代に『玉篇』が大いに流行した。豊富な注釋には原典が引用されているために、一種の便利な類書として使用されたのである。いちいち原典に當たらず、『玉篇』の引文から孫引きされることも間々あつた。部首配列された字書であるから檢索には便利であつたことも幸いし、こうした流行を見たものである。また『說文』は文字を出すのに小篆を用いるが、『玉篇』は小篆を捨て隸書を採用した。これも時代の要請に即應した姿勢である。掲出字のすぐあとに反切で音を示してあるのも新機軸であつた。當時の貴族社會には大いに受け入れられたものと推測する。

しかるに三十巻という浩瀚さが却ってわざわざわいしてか、唐の上元元年（六七四）に至って孫強の増字減注本が出現することになった。孫強によるこの上元本は、掲出字を顧野王原本の一六九一七字から二二八二七字にまで増加させているが、一方で大幅に注文を削ってしまったために、まったく原本の姿を損なってしまった。現行本である宋代の『大廣益會玉篇』は孫強の系統を受け継ぐ減注本であることはいうまでもない。現行本の體例を作った孫強の上元本も、大廣益會本が行われるに及んで世上から姿を消してしまった。ごく最近になって、金人邢準の『新修篆音引證群籍玉篇』（二一八八）が底本とした『玉篇』がとりもなおさず孫強増字本『玉篇』であることが分かったのは、最新の知見である。では上元本が現れたことによつて、顧野王の原本『玉篇』は急速に廢れていったかという、必ずしもそうとは言いい切れず、唐代を通じてさまざま『玉篇』が通行していたと思われる。それは敦煌遺書中に見える斷片が、なお原本に近い注文を保存していることから推測できる。

いずれにせよ顧野王の原本『玉篇』は中國では早くに亡逸したが、幸いに日本には卷第八、第九、第十八之後分、第十九、第廿二、第廿四、第廿七の古抄本七卷が、寺社や收藏家の手によつて今日まで傳えられ、原本の姿を窺うことができるのは奇跡的と言つても好い。三十巻全部ではないにせよ、原本を目の當たりにし得るのは、日本において古くからこの字書が轉々鈔寫された賜物である。かくして原本『玉篇』古寫本の存在は江戸時代後期あたりから慧眼な學者たちの注目するところとなり、さらなる轉寫本が作られるなどした。明治になると、楊守敬（一八三九—一九一五）が日本に來たり、森立之（一八〇七—一八八五）らの協力を得て、日本に残存する古寫本や宋元の古槧本を蒐集した中に、原本『玉篇』が含まれていたことは言うまでもない。黎庶昌の名で出版された『古逸叢書』（一八八四）には卷第九、第十八之後分、第十九、第廿二、卷廿七が影刻され、中國學界にも廣く知られるようになった。『古逸叢書』の刊刻を請け負つたのは名工木村嘉平（第四代）で、その出來榮えは流石に見事なものであ

る。もともと原書の忠實な復原という意味では、今日の複製技術と比較しても餘り意味がない。『古逸叢書』出版の前後にも、日本では柏木探古所藏本（卷十八之後分、一八八二）、高山寺所藏本（卷廿七前半、一八八三）が相繼いで刊行され、やや遅れて神宮文庫本（卷廿二、一八九四）も刊行された。その後、羅振玉による影印（一九一六一—七）があり、さらに東方文化學院による複製本（一九三二—三三）の出版が行われた。最後のものは、事情で福井崇蘭館が所藏していた斷簡（卷九の中間、嗣字より数字に至る六十八行）などが収録されていないが、コロタイプによる精巧な卷子装の複製であり、今日もつとも據るべきテキストになっている。

以上、いささか遠回りしたが、顧野王の名がふたたび世に知れ渡ることになったのは、楊守敬等による原本『玉篇』日本古寫本の再発見によるところが大きい。その原本『玉篇』の日本における再発見を承け、原本から大廣益會本に至る變遷、さらにその後に出版された諸本、加えるに日本で盛んに行われた『和玉篇』をふくむ極めて網羅的な研究を行った人に岡井慎吾（一八七二—一九四五）がいる。その『玉篇の研究』（東洋文庫論叢第十九、一九三三）は、『玉篇』の総合的研究書として、押しも押されぬ古典的著作であり、今でもなお十分参考に價する。巻頭圖版二〇葉、正篇四三〇頁に加え、後篇「玉篇佚文」^(四)一九四五條、一七八頁、更に書後と索引が付いた巨冊である。

ところで、この『玉篇の研究』は岡井慎吾が京都大學に提出して、昭和六年に學位を受けた博士論文であり、學位の對象となった時點での論文名は「玉篇考」であった（一九三一年九月二二日學位認定、學位記番號二三）。岡井がこの論文を京都大學に提出したのは昭和二年（一九二七）一月一九日のことであるが、學位認定までに前後四年八月月を要している。該書の「書後」によって、この書の成り立ちを見てみよう。

岡井はこの研究を大正一四年（一九二五）四月二八日、慧琳『一切經音義』から「玉篇をカードに抄出すること」から始める一方、『和玉篇』諸本の解題に取りかかり、夏休みには天草島へ避暑して論文の構成プランを練り上げ

た。岡井は言う、「私も初めは雑誌の二三回分と思つた。佚文を拾ふことにしてからは小冊子位と思つた。然るにこんなプランが立つ様になると悍くも學位論文にならぬかと思つたり、予の學歴ではと尻込したり、出來榮によりてはとあへな頼みをかけたり、狭き胸は窓の外の渚による波と俱に千々に碎かれた夜もある」と。かくして銳意材料の蒐集につとめ、翌年の夏休みに再度天草で執筆にいそしんだ結果、八月一日、ついに「玉篇の研究一應寫了、七百十四枚」となつた。その後の半年に補正を重ねて定稿とし、學位論文として提出したのである。

書後に自らいうように、岡井はさしたる學歴を持っていなかった。福井師範を出たあと、小學校準教員の免状をもらい、明治二六年（一八九三）四月に地元の小學校の教員となつた。前年までは卒業と共に正教員となるはずであつたが、この年から制度が変わつて準教員の免状しか呉れなくなつたのだという。その後は二十五年間の長きにわたり、中學校に勤務した。最初、福井中學校では、正規の教諭ではなく教員心得であつた。拔擢してくれた校長はすでにその職を去り、小學校から來たというだけで云われなき生徒の排斥に遭つた。岡井はそれに發奮して文部省の中等學校教員檢定試験を受け、國語科と漢文科に合格した。そこで愛媛縣の西條中學に轉じ、翌年金澤の第二中學の招聘を受けて六年間勤務、繼いで明治三八年（一九〇五）に廣島高等師範學校に附屬中學校が設置されたので、その招聘をうけて赴任した。この地に在職十一年、「教えを受くるに本校の教授方あり、讀むに圖書館ありで、岡井の學究生活においてもっとも充實した時期であつた。しかし大正五年（一九一六）、長年世話になつた舊師に報いるべく、教諭兼教授の地位をすて、一囑託として朝鮮平壤中學に赴任した。この期間は、ほとんど校務に心身を勞し、學問に没頭できなかつたが、大正一〇年（一九二一）六月から八月にかけ、念願であつた禹域の遊を達成することができた。齡五十も過ぎ、少年に教授するには少し老け込みすぎたとの思いから、教職を辭する決意をしたところへ、熊本醫科大學豫科教授に招聘されたのを幸いに、少年でなく青年の教育ならばということで、大正一一

年から大學豫科に勤務した。昭和四年（一九二九）、縣立であつた熊本醫科大學が國立に移管されることになり豫科が廢止されたが、その前年から第五高等學校の講師となつていた。さらに昭和七年一〇月から半年の間、九州帝國大學法文學部に講師として出講した。在職四十年、岡井は小學校、中學校、大學豫科（高等學校）、大學の四つの教壇に立つたことになる。この閱歴からみて分かるように、岡井慎吾は實に努力の人である。長く教師として勤務しながら、校長にも首席教諭にもならなかつたのは、「教員ではあるが、讀書人たる生活を續けたい爲に自ら求めた結果に外ならなかつた」というが、日々怠ることにない研鑽が晴れて學位授與という榮譽に結びついたのである。學問は岡井にとつて生活そのものであつたと言えるかも知れない。

とはいえ、論文を提出してみたものの、學位授與までの道のりは簡單ではなかつた。上述のように、論文提出から學位認定までは四年八ヶ月待たされた。岡井自身の言葉を借りよう。「二年位は待つが野暮だと聞かされたので念じ過ごして、四年目から待ち出したが杳として消息がない。五年一月十八日の日記に、〈三歳光陰今日周、杳無消息到書樓、始知長信宮中怨、輦路黄昏水濁流〉の詩が書いてある。其の年も暮れ、六年も花は散り麥は刈り取られる。もはや駄目なのだらうと諦めようとすれど諦め得ぬ日を送つたが、七月一日に突然吉報を得た。この時は喜ぶよりも夢かと疑ふ心が深く、幾度か其の電報を讀み直した。今日までは餘り遅いと恨んだが、かう定まると私の如き者によく授與せられたことゝ感謝の涙の外は無い。」

ところで『玉篇の研究』は岡井が熊本に居たときの研究である。この時期は、中學校にくらべて時間的な余裕もあり、大正一五年にはすでに『五經文字九經字樣箋正』の著作を出版している。上に見たように、逡巡した擧げ句、この研究を學位論文として提出することにしたのには、京都大學の湖南内藤虎次郎（一八六六一—一九三四）の誘掖があつたらしい。現在關西大學の内藤文庫中に保存される、岡井が湖南に宛てた書簡にそのことを思わせる段落が

ある。「私論文は學歴なき身の悲哀を切に感じ居り候。御同情ある内定案を拜し、先生に見て戴けたらばと遺憾に存じ候。」日付は昭和二年六月二五日であり、論文提出後約半年のことである。湖南自身はすでにその前年に京都大學を停年退職していたから、岡井の論文を直接に審査することが出来ず、後事を同僚に託していたのである。岡井と同じく秋田師範學校卒の學歴しかもたない湖南が、岡井に「同情」したことは考えられるが、論文の内容に高い評價を與えたことは言うまでもない。湖南をたよつて學位論文の提出を望む人もないわけではなかったが、學位論文に相應しなくては、湖南は峻拒するのが例であつた。^(六)

いざ出版という段になつても、困難が立ちはだかつたようである。學位論文は出版が原則であるため、某書店に頼んだところ、全部は困るが前篇だけなら出してよいということになつた。その頃、昭和天皇が福井縣に行啓された折の下賜金を基礎として成立していた若越輔成會の奨勵金が岡井に與えられることになつた。岡井はそれを全部提供するから何とか後篇も出してくれるように頼み込んで、書店の同意を得た。しかし前篇の補訂に際して、頁數が増加したのに對し、約束通り省略せよという無理解な注文である。「一世一度の事だから心ゆく迄の物を出して聊かにも學界に貢獻したい」という思いとの板挟みに苦しまされた。勿論いずれの書店かまでは書いていないが、民間の出版社などというものは大概そんなもので、學術出版の困難は今も昔も變わりはない。幸い東洋文庫がその論叢の一として文庫の經費で出版してくれることになり、本書が今見るかたちで世に出たわけである。ひよつとするとこれにも内藤湖南の推擧があつたかも知れぬと、筆者は推測しているが、いまのところ何等確證を見出せない。

『玉篇の研究』は昭和八年一二月の出版だが、その後も引き續き、昭和九年九月に『日本漢字學史』が、同一〇年一一月には『柿堂存稿』が出版されている。

『日本漢字學史』はいわゆる專題研究というものではない。この書物は漢字に關してわが國に起こった歴史上の出來事と、漢字に關する日本人の著作および研究を、古代、中世、近世の三時期にわかつた上、計一一五の項目を立てて敘述したものである。その扱う範圍は字形にかかわる狹義の文字學にとどまらず、韻學、文法、辭書にも及び、さらには「命名法の變化」や「年號の制定」などの項目も見られる。岡井の學風を反映して、その記述は極めて謹慎かつ批判的である。岡井は謙遜して「村學究の片手間の仕事」と言っているが、むしろ長年の教壇生活の中で蓄積された知識の集大成といえるかも知れない。翌一〇年二月には早くも重版が出た。當初から非常な歡迎を受けたことが分かる。とりわけ近世篇では江戸時代の學者とその著作に關する解説が主たる内容を占めていて、卷末の索引を利用すれば、便利な工具書としても使用できる。復刻本も存在するのは、本書の價値がなお認められている故であろう。『玉篇の研究』が生まれるには、本書に見られるような、文字音韻學に對する廣範圍の學識の支えがあつた。

岡井にはまた『柿堂存稿』という文集がある。昭和一〇年(二九三五)十一月の發行で、發行所は熊本市の有七絶堂となつてゐる。有七絶堂とは岡井の書齋の名であり、家の隅に増築した「四疊半に足りない物置ともつかぬ平屋」であつた^(八)そう^(八)で、これは従つていわゆる自費出版の書物である。卷末の自序は、昭和八年三月三一日に識されている。この日は岡井の教師生活が滿四十年に達した日であり、本書の刊行はその自祝の意味を込めたものであつた。實は筆者が岡井の著作で最初に入手したのがこの『柿堂存稿』であつた。まだ學生時代のことであつたが、京都のとある古本屋で見つけて購入した。その頃には岡井が如何なる人であるかすら知らなかつたが、収録された論文の數篇に興味を引くものがあつたためかと思う。至つて地味な並裝の書物で、値段もさして高くなかつた筈だ。大學院に進學したあと、ある日に先師小川環樹教授の研究室で、偶々書架にあつたこの書物を取り上げたところ、

「一寸めずらしい本やろ」と言われ、自分も持っていますとも言えず、「ハア」と答えた覚えがある。

『玉篇の研究』は昭和八年一二月の出版、一方『栢堂存稿』の自序は同じ年の三月末に書かれているから、本来は同じ頃に刊行されていても好いはずだが、実際にはかなりずれ込んでしまった。序文の末尾には、「この書は印刷が非常に後れて三年越になった。今や私も病老併せ至りて存稿第二を出されさうにもないから「玉篇の研究補正」を雑著の一ツと取換えて巻を成した」という昭和一〇年六月の追い書きがある。印行が遅れたおかげで、「補正」が収録されたのは、『玉篇の研究』を利用する人にとっては有り難い。『研究』の刊行後、何篇かの書評が出現したが、「補正」ではそれら批評を逐一紹介しつつ、それに回答するかたちをとっている。『研究』と併せ読むべき材料だが、『存稿』の通行が必ずしも廣くないので、どれほど利用されているかはやや覺束ない。

岡井はその後も文字・音韻さらには書誌などについて、幾つかの學術誌に精力的な執筆を續けた。出されそうにもないと言った「存稿第二」の分量くらいはありそうである。誰かその企劃を試みないものであろうか。

以上、岡井慎吾の人とその業績について簡単に紹介したが、彼の研究によつて顧野王『玉篇』がふたたび脚光を浴びることになったのは事實と思われる。出版後、逸早く書評を書いた岡田希雄は「原本玉篇を惜しげも無く亡した支那では、玉篇の改悪は行はれても、研究は何ら行はれず、長らく閑却せられ、清末の楊守敬の努力や、今では滿洲國の大官たる羅振玉氏の努力の如きも大したものとは言へないのである。…(中略)…斯う云ふ風に玉篇の研究としては見る可きものは無かつたのである。だがしかしつひに眞の大研究は現はれた。それは岡井慎吾氏の研究にして…(後略)」とまで持ち上げている。ともあれ岡井は顧野王の功臣と稱すべきであらう。

ここで岡井の研究の恐らくは最も中心となつたであろう原本玉篇の古寫本について話を戻したい。二〇一四年一〇月、筆者はある會議に出席するために武漢大學を訪れた。武漢の湖北省博物館には、敦煌寫本のほか楊守敬の持

ち歸つた日本古寫本があるということを聞いていたので、この機會に一見したいと思い、大學から紹介を頼んで博物館に見學に行った。豫定の寫本を一通り見終わつた後、管理責任者の某氏が、折角日本から來たのだからと、古ぼけた一冊の手鑑を取り出してきた。やはり楊守敬が日本から將來したものだという。貼り込まれた古筆切を一枚一枚めくつていくと、ほとんどが假名で書かれたもので、筆者の興味を引くようなものはない。態々出してくれたものなので、一應最後までめくつてみようと思つていくと、そこに漢字で書かれた一葉が眼に入つてきた。何とほなしに見慣れた筆蹟である。よく見ると、字書であることが分かる。水部の文字が並んでいて、どうも『玉篇』らしい。ひよつとすると大發見かもしれない。しかし『玉篇』の水部はたしか既に複製も出ていたはずだ。ならばこれはその轉寫本だろうか。とりあえず寫眞を撮らせてもらつて歸つてきた。

その後、少し調べてみた結果、以下のことが分かつた。

この一葉は水部のうち湮字から潦字に至る十四行で、古逸叢書本に收められているものに一致するが、東方文化學院本には缺けている。古逸叢書のこの部分は探古柏木貨一郎（一八四一—一八九八）の藏品を借りて影刻したもので、當時は柏木が持つていた。

柏木は明治一五年、自家所藏の別の卷十八後分を影印出版した跋文に、卷十九水部について、次ぎのように言つてゐる：「自冷字至潦字二十六行、余藏之。自濩字至洗字、藏于東大寺尊勝院。」當時尊勝院にあつた「濩字至洗字」百二十七行は後に散出して、最終的に藤田家の所藏となり今日に至つてゐる。岡井の『玉篇の研究』には、「その初の廿六行は柏木氏の手に歸し、…（中略）…柏木氏の所藏もまた今は同家（藤田家）に存せり」とある。とすれば、武漢にある十四行はそもそもどういふものであろう。もし藤田家の所藏に古逸叢書所收分がすべて備わつていたとすれば、戦前に東方文化學院が複製本を出したときになぜ兩者を併せて影印しなかつたのであろうか。東方

文化學院本は渡字に始まり洗字に終わっていて、それ以外の文字は見えない。武漢で撮った寫眞と東方文化學院覆製本を並べて見ても、その書體は同じものに見える。筆者の心證では、これは藤田家所藏寫本に前接する斷簡の一であるに違いないと見た。岡井のこの箇所の言及はおそらく誤った情報によるものかと思う。

では残りの十二行はどこへいったのかというと、冷字から湛字に至る十一行はかつて安田文庫に所藏されていたという川瀬一馬の報告がある。安田文庫は戦災に罹ったから、いまは焼亡したはずだ。川瀬によれば、この斷簡は大槻磐溪（一八〇一—一八七八）がその晩年に作成した張込帖「知見開導帖」に見えるもので、その手識に「此方則東京湯島圓滿寺僧舊藏所贈。紀元二千五百三十四年（二八七四）甲戌春三月、愛古堂主人記」とあったというから、かなり早い時期に大槻の手に渡ったものである。幸いに川瀬の文章には不鮮明ながら寫眞が添えられているので、それを藤田家の東方文化學院覆製本及び湖北省博物館の斷簡と較べて見ると、おそらくこれらが同一寫本の離れであることは誰にも領會されるはずである。古逸叢書本すなわち柏木探古の持っていた廿六行には、安田文庫舊藏斷簡の末尾、湛字の後に更に一行が書かれてあった。湛字の注文の續きの「没也」から湛字古文の濫字に至る一行がそれだが、不思議なことに大槻磐溪から安田文庫に歸した張込帖にはこの一行が見えない。おそらく大槻の手に入る前に切られたものであろう。

かつて長澤規矩也は『玉篇』の斷簡の傳承を取り上げ、とりわけ水部の殘卷に考察を加えたことがある。長澤は便宜上、柏木の廿六行を以下のように區分する。

甲 冷至湛 十一行 安田文庫所藏

乙 つゞき 一行（古文の湛字を含む）

丙 湮至瀑 十二行

丁 つゞき 涇至潦 二行

この甲乙丙丁の順序は『玉篇』として正しい順序である。ところで湖北省博物館の十四行は、丙丁が連続して書かれている。最終行の前に紙の貼り継ぎが見えるものの、後ろから二行目の部分にはその形跡がない。長澤が丙丁を切り離して議論したのは、傳鈔模寫本に丙、甲、乙、丁の順になっているものが多いからであった。長澤は「水部断簡は、安田文庫以外に、涇至潦の十二行の断簡及び、乙丁を併せたる三行の断簡となりて傳はりたるものなるべく、恐らく安田文庫現藏の断簡が作られし時に同時に切断せられたるものならん。乙丁の三行は現存の古筆手鑑の中に入りて、何れかに保存せらるゝものならんか」と結論する。しかし現在、丙丁が連続して書かれた湖北省博物館の断簡が見いだされた以上、この結論は修正が必要である。また、安田文庫舊藏、すなわち明治の早い時期に大槻磐溪に歸した十一行と、武漢の十四行が、藤田家の寫本に接續するもので、しかも別々に傳承されたものとすれば、柏木が所藏していた廿六行は、また別の由來をもつ傳鈔本であったと見なければならぬであろう。

筆者の武漢における發見の概報は以上の通りである。各断簡相互の同定や、前後關係などは、圖版をならべてみないと理解しがたい点が多いことと思う。詳しくは別稿を用意したいと考えているが、これは筆者にとって近年のちよつとした發見の一つであった。

ちなみに筆者を武漢に導いたのは、顧野王の夢のお告げがあつたわけではない。偶然である。

注

(一) 魏現軍「《玉篇》研究…以孫強《玉篇》爲中心」、上海師範大學博士學位論文、2012年5月。また楊正業・馮舒冉・魏現軍・楊濤『古佚三書《上元本玉篇》《韻》《小學鉤沈三編》』(四川出版集團・四川辭書出版社、二〇一三)に全書の

輯校本が収録されている。

(二) 高田時雄「玉篇の敦煌本」『人文』(京都大學教養部) 三三(一九八七)、五三―六四頁、同「玉篇の敦煌本・補遺」『人文』(京都大學教養部) 三五(一九八九)、一六二―一七二頁。

(三) この崇蘭館舊藏の六十八行は、近年「再発見」されたあと、平成二二年度に京都國立博物館の購入するところとなり、併せて重要文化財に指定された。公表された購入金額は一四一、七五〇、〇〇〇圓とある(同館の平成二二年度購入文化財一覽)。

(四) のちに馬淵和夫『玉篇佚文補正』が出た：東京文理科大学國語國文學會紀要第三號(一九五二)、一五二頁。

(五) 以下の経歴については、『柿堂存稿』(昭和十年、熊本市：有七絶堂發行) 卷末の自序(三三三―三三八頁)、及び同書所收「四ツの教壇」(三一九―二二八頁)による。

(六) いま誰とは言わないが、湖南『全集』の書簡集にその一例が見える。

(七) 岡井慎吾は號して柿堂と曰った。『西陽雜俎』卷十八に「俗に謂う、柿樹に七絶あり。一に壽、二に多陰、三に鳥の巢なく、四に蟲なし、五に霜葉を遊ぶ可く、六に嘉實あり、七に落葉肥大」とあるのに據って、その齋號を有七絶堂としたものである。『柿堂存稿』にも「有七絶堂」がある。

(八) 同書附録の令嬢による「有七絶堂」と題する一文。

(九) ちなみに「補正」に挙げられた紹介・書評は、川瀬一馬、神田喜一郎、岡田希雄、土井忠生の諸氏によるもので、その掲載誌などは「補正」に詳しい。

(一〇) 岡田希雄「岡井博士の名著『玉篇の研究』」『國語・國文』第四卷第五號(一九三四)。

(一一) 川瀬一馬「玉篇水部の斷簡に就いて」『椎園』第一輯(一九三七)、のち川瀬『日本書誌學之研究』(一九四三、大日

本雄辯會講談社）一四七九—一四八一頁。

(二二) 長澤規矩也「原本玉篇古寫本斷簡」『書誌學』第一四卷第四號(一九四〇)、二八一—三二二頁。

(たかたときお・中国復旦大学特聘教授)